

○研究タイトル

これからの 三陸地域の観光復興について（提言） —東北観光復興研究会〈協力 観光庁〉

○研究担当者：梅川智也、小池利佳、高崎恵子、後藤健太郎

○担当者からのメッセージ

わが国を代表するリアス式海岸であり、世界三大漁場といわれる豊かな海を有する三陸沿岸が、2011年3月11日、東北地方太平洋沖地震とその後起きた津波により未曾有の被害を受けました。この地域の基幹産業である漁業と水産業への被害は甚大なものですが、観光産業についても、観光資源や観光施設、宿泊施設の一部が壊滅的な状況であり、復旧、復興への具体的な検討は、まだ手つかずのままと言っても過言ではありません。

東北観光復興研究会（事務局：財団法人日本交通公社）は、観光庁の協力の下、観光、漁業、港湾、景観、自然環境、地域振興など幅広い分野の専門家をメンバーとして、2011年6月に設置されました。東日本大震災によって甚大な被害を受けた三陸地域を、自立した地域経済の営みが可能な魅力ある国際的な観光エリアとして復興すべく、その基本的な考え方を構築することを目的に、以下の3点を基本方針と位置づけて2カ月間検討を行い、政策研究大学院大学特別教授・森地茂先生の監修の下、財団法人日本交通公社が取りまとめを行いました。

- ①個別の市町村単位や県単位ではなく、三陸地域全域としてトータルな観光復興を目指す
- ②復興のプロセスに応じた観光復興策を提示する
- ③従来の観光構造に戻すのではなく、三陸地域の新たな観光の姿を模索する

本研究会の提言（以下本提言）は、2011年9月現在のあくまでイメージ段階の全体構想ですが、今後、地元が主体となって地域の特性に応じた観光復興を目指される際のヒントとして少しでも役立つことを念頭に置いています。

東北観光復興研究会 委員

〈五十音順、敬称略〉

大野 正人（財）日本交通公社 理事	七條 牧生 観光庁観光地域振興部 観光地域振興課長
熊谷 圭介（株）ラック計画研究所 代表	下村 彰男 東京大学大学院 教授
毛塚 宏（財）運輸政策研究機構 招聘研究員	○安島 博幸 立教大学観光学部 教授
齋藤 潮 東京工業大学大学院 教授	婁 小波 東京海洋大学海洋科学部 教授
志賀 秀一（株）東北地域環境研究室 代表	

事務局：財団法人日本交通公社研究調査部 / ○印は座長

<目次>

1. 三陸地域の観光復興の意義と目指すべき方向

2. 復興プロセスに応じて取り組むべき施策

- (1) 今すぐ実施できる主な取り組み
- (2) 将来の観光復興へ向けて今から検討すべき主な取り組み
- (3) 時間をかけて実施すべき主な取り組み

3. 終わりに

1 三陸地域の観光復興の意義と目指すべき方向

「わが町」の観光復興は、住宅の再建、漁業の復興などが終わって10年くらい経過してから……と考えていたが、震災から4カ月たった今では全くその考え方を変えている。お見舞い客、各種ボランティア、視察客など、多くの方々にわが町を訪れていただき、地元の住民と交流していただくことが経済的にも精神的にも重要であるということが分かった。これを『観光』と言えるのかどうか分からないが、新しい形の『観光』が確実に芽生え始めていることは確かで、それがわれわれの元気の源になっている。改めて『観光』に対する認識を新たにしている。これは九死に一生を得たある自治体の首長のお話です。

それぞれの市町村で被災状況は異なりますし、観光復興に対する住民の感情も一律ではありません。まずは津波で犠牲になられた方々の鎮魂が最優先されることは言うまでもありませんが、人口流出が続く三陸地域で、観光や交流による働く場の創出は、被災者の方々にとって生きる支えとなるでしょう。漁業の復興と併せて、津波の爪痕に触れる防災教育、あるいは復興支援のボランティアのような社会貢献等、といった地域の人々に寄り添い、交流できる観光は、「エシカル・ツーリズム (Ethical Tourism／倫理的観光)」として今すぐにでも取り組むことができます。

こうした社会性のある、しかも地域経済に即効性のある観光を短期、中長期にわたって被災地の復興に活かすことは、この地域の「観光」そのものを見直し、新しい魅力を見つける機会ともいえます。

本提言では、全体のコンセプトを

新たな三陸観光を目指して——「三陸・海と暮らしのツーリズム」——とし、以下の6つを三陸観光復興の目指すべき方向として設定しました。

①世界に認知された“三陸”の地名と地域特性を生かし、国際的に通用する質の高い観光エリアを目指す

～今回の大震災を契機に、人と人との触れ合いや交流、三陸地域の特徴的な生活文化である「海と暮らし」を生かしながら、国際的にも通用する施設、サービス水準の向上を目指して観光の「質」の転換を図る。

②“自然資源を見せる”観光だけでなく、これまで埋もれていた多様な地域資源を活用する

～海岸景観を中心とする観光ポイントを巡り、海産物を土産に買って帰る従来型の周遊観光に加えて、津波遺産を含む三陸の地域資源を最大限に生かした新たな観光に取り組む。具体的には、風景や生活の背後にあるもの——漁業・漁村文化、食文化、コミュニティ、ジオ^{*1}、あるいは神楽、民話、奥州藤原氏、伊達藩、製鉄、人物等の潜在資源を生かした観光への展開を図る。

③“平成の大津波”の教訓を防災教育・研修旅行に生かす

～三陸地域は、日本有数の美しいリアス式海岸である半面、その沖合の2つのプレート破壊によって大地震が発生する。そのため、明治29年、昭和8年等たびたび大津波に襲われてきた。三陸地域には、津波から身を守り生きていくための知恵が数々あり、それらを日本そして世界に発信していくことが、世界中からも求められている。

④新たな観光の付加価値として“インタープリテーション”の充実を図る

～地域資源を最もよく知る地元住民や被災体験者等による“語り”“解説”が人の感動を生む。そうした観光客と地元住民との緊密な交流や絆を大切にいくためには、「インタープリテーション」^{*2}の充実が重要である。

⑤生活空間・産業空間の再生においては、景観に十分配慮した美しい街並みとすることで地域の観光魅力の向上を図る

～これから急速に進む地域の生活空間の再生や防災施設の建設に当たっては、地域固有の景観に十分配慮し、全体として調和のとれた美しい街並みづくりを進める。

⑥ 社会資本整備等の復旧・復興のなかに「観光」の視点を取り入れる

～「用・強・美」^{※3}の理念に基づき、社会資本整備や各種施設整備に、観光客を含めた来訪者の視点、観光の視点を取り込んでいく。

※1 地球の営みによりつくられた自然景観等を観光等に生かす取り組み

※2 自然・文化・歴史（遺産）を分かりやすく人々に伝えること。知識そのものを伝えるだけではなく、その裏側にある「メッセージ」を伝える行為。あるいは、その技能のこと。

※3 ローマ時代の建築家ウィトルウィウスが唱えた、「用（機能）」「強（強度、耐性）」「美（美しさ）」が一体となって良い建築ができるという概念

2 復興プロセスに応じて 取り組むべき施策

本提言では、以下のように、「新たな三陸観光に向けた10の提言」を取りまとめました。この地域の観光復興は、基幹産業である漁業と水産業の復興と密接に連携し、美しい三陸海岸の景観を見る観光に加えて、三陸復興国立公園構想とも連動させた「海と暮らし」を強く意識した観光を進めるべきであるとしています。

新たな三陸観光に向けた10の提言

- ① 漁業との連携、共存による新たな観光事業を展開する＝海業^{うみ}の推進
- ② 海の幸・素材の価値を三陸地域で提供する＝海の恵みで食の魅力づくり
- ③ 三陸の暮らしや自然を表現する宿泊・滞在機能を導入する
- ④ 三陸の生活文化や地域景観を反映した街並みを創出する
- ⑤ 内陸部と沿岸部の交流を促すストーリーのある観光を展開する
- ⑥ 三陸の生きていく知恵を防災教育として全世界に伝える
- ⑦ ジオツーリズムによる新しい観光を推進する
- ⑧ 新たな交通システムで、三陸観光の魅力と利便性の向上を図る
- ⑨ 広域的な組織体（プラットフォーム）を構築する
- ⑩ 地域プロデューサーやガイド、インタープリターを育成する

さらに、以下のように、復興プロセスに応じた具体的な取り組みに早急に着手することが望まれます。

（1）今すぐ実施できる主な取り組み

- ・ ボランティアや視察者、次いで防災教育旅行の受け入れ態勢整備
- ・ 被災した地域住民の感情に配慮しつつ、津波や震災の体験、復興状況などを伝えるガイド、インタープリターの育成
- ・ 三陸地域全体の観光復興を推進する広域組織（プラットフォーム）の設置
- ・ 地域の観光受け入れ状況のきめ細かな情報発信

（2）将来の観光復興へ向けて今から検討すべき主な取り組み

- ・ 高台移転と併せた「集落による民宿運営」の検討と整備
- ・ 津波遺産（仮称）として保存可能な被災構造物、自然地形などの調査とリスト化
- ・ 復元すべき街並みおよび歴史的な建造物の抽出と復元の実施
- ・ 魚市場や水産加工施設などの復興と併せた観光利用の検討（産業観光等の導入）

（3）時間をかけて実施すべき主な取り組み

- ・ 色やデザインに配慮した美しい街並みの整備
- ・ 三陸地域で整備が進む縦横断の高速道路網を活かした新たな観光ルートづくり

- ・日本風景街道の取り組みと連携した観光地域づくり
- ・三陸復興国立公園（仮称）、三陸海岸トレイルに接続する遊歩道の整備
- ・国際的にも通用する質の高い、また三陸地域の文化を反映した宿泊施設の整備
- ・三陸地域一帯で取り組むジオツーリズムの推進と世界ジオパーク認定

3 終わりに

震災から半年が経過した三陸地域の現状は、大半のがれきが片づけられてはいるものの、まだ復興への道筋は見えてきません。復興へのスピードが重要ですが、まだエンジン全開とはいえない状況ではないでしょうか。今後、それぞれの市町村で復興計画が策定され、社会資本や住宅などの再建が進み、美しい街並みが戻ったとしても、この地に住んで生業を営む「人」がいなくなってしまうては意味がありません。

わが国が戦後復興でいち早く外客誘致・外貨獲得に取り組もうとしたように、三陸地域も、東北の各地域と連携し、観光・交流産業の振興に力を注ぎ、一日も早い復興へとつなげていくことが期待されます（2011年9月現在）。

図 1 将来の三陸観光の全体イメージ

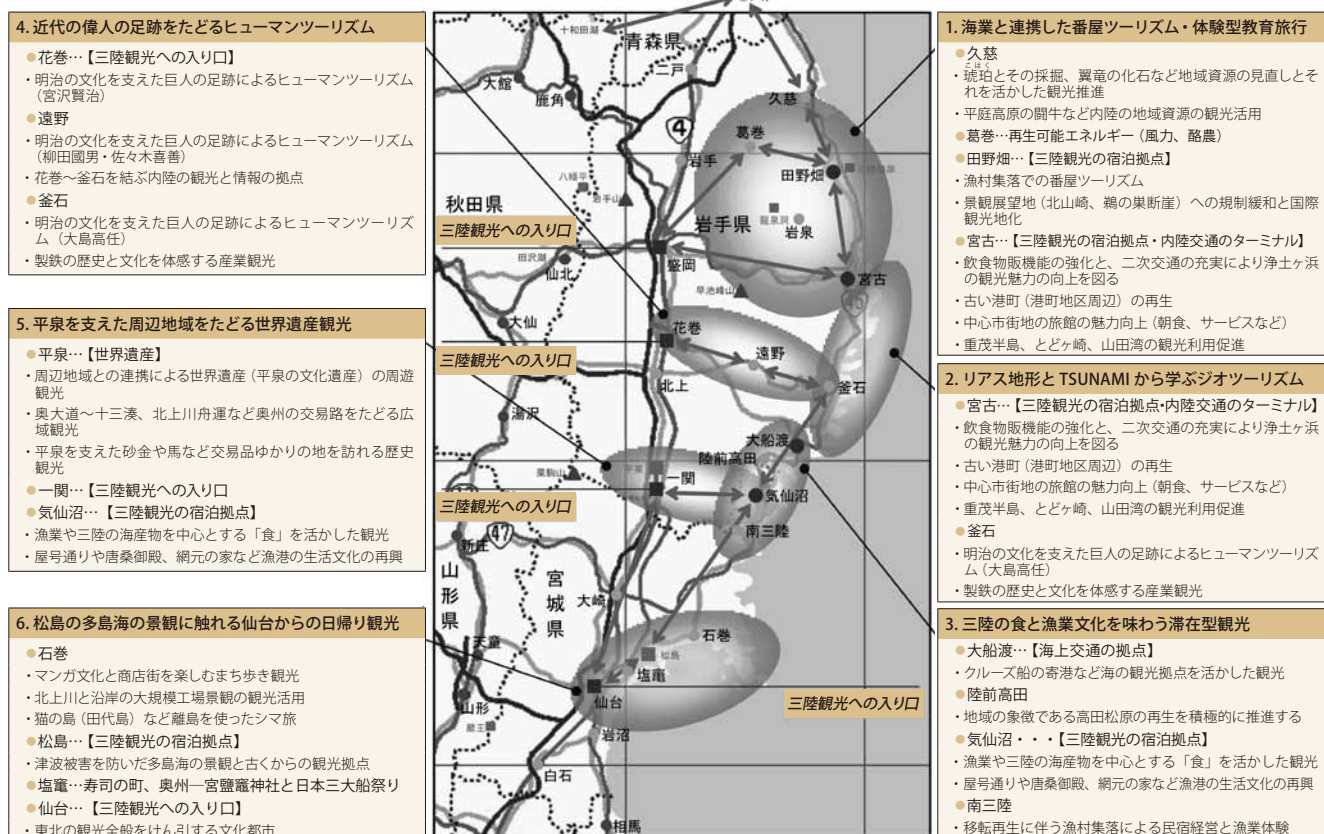
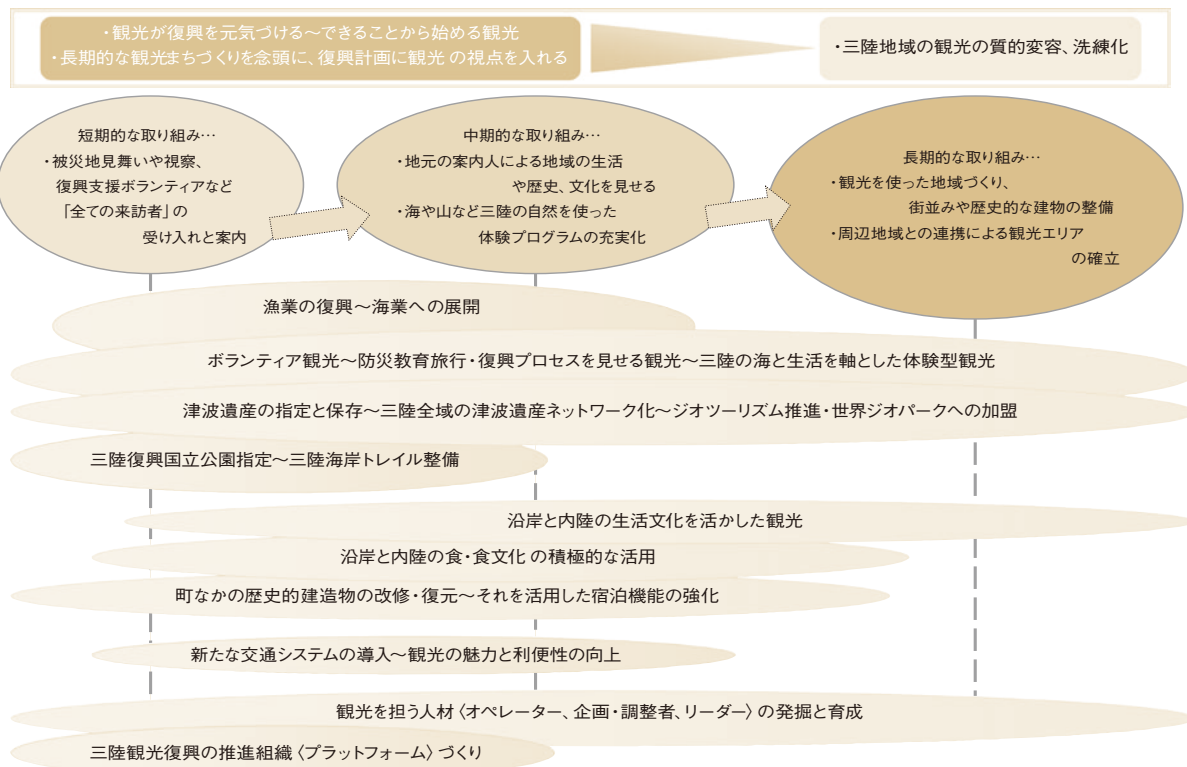


図 2 三陸観光の復興プロセスに応じた取り組みイメージ



『これからの三陸地域の観光復興について』体系図

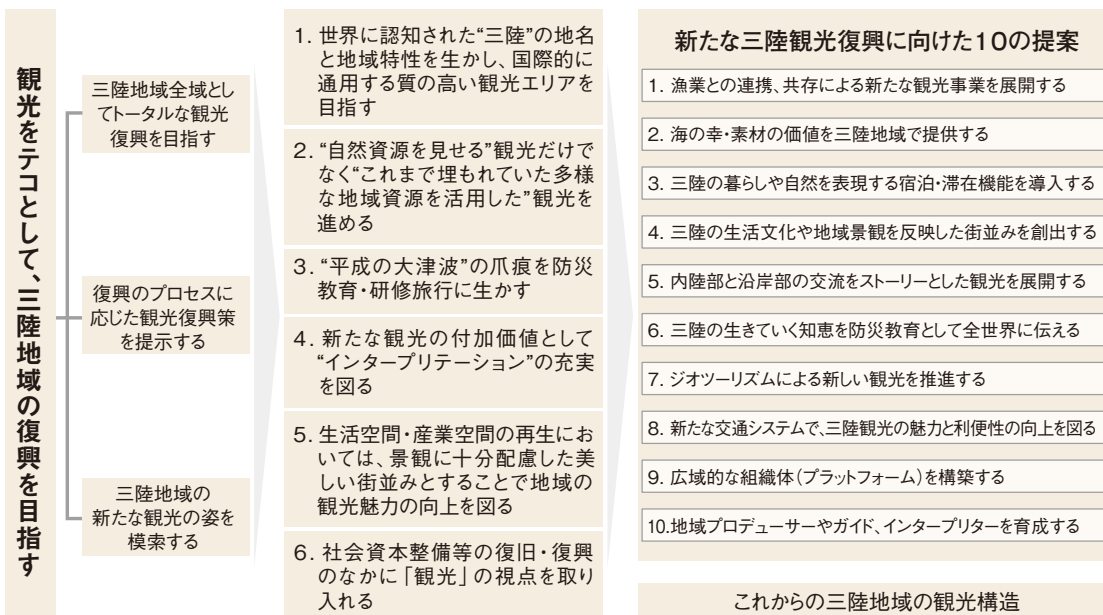
〈コンセプト〉

新たな三陸観光を目指して ー「三陸・海と暮らしのツーリズム」ー

〈目的〉

〈基本方針〉

〈目指すべき方向〉



タイプ別の観光復興イメージ